



TITLE:

<批評・紹介>モンゴル人民共和国科学アカ
デミー編『モンゴル研究』 Монголън
судлал. 『歴史研究』 Туухийн судлал. 『言
語文学研究』 Хэл зохиол судлал. 『口頭文
学研究』 Аман зохиол судлал. その他。

AUTHOR(S):

小澤, 重男

CITATION:

小澤, 重男. <批評・紹介>モンゴル人民共和国科学アカデミー編『モンゴル研究』 Монголън судлал. 『歴史研究』
Туухийн судлал. 『言語文学研究』 Хэл зохиол судлал. 『口頭文学研究』 Аман зохиол судлал. その他. . 東洋史研究
1973, 32(1): 113-118

ISSUE DATE:

1973-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153500>

RIGHT:

『モンゴル研究』 Монголын судлал.
『歴史研究』 Түүхийн судлал.
『言語文學研究』 Хэл зохиол судлал.
『口頭文學研究』 Аман зохиол судлал.
その他。

モンゴル人民共和国
科學アカデミー 編

近年におけるモンゴル人民共和国の學術文化の興隆にともない、この國の學術的出版物の、世界のモンゴル學界において占める位置が、最近、識者によって重視されるに到っている。この現狀に鑑み、筆者は、モンゴル人民共和国で出版されている多くの學術的研究誌の中で、特に本誌「東洋史研究」に關連するところの多いと思われる二、三の學術機關誌をこゝに紹介し、その内容の一部にふれ、紙数がゆるせばモンゴル國內における最近のモンゴル研究の若干の問題に言及したいと考える。

二

一九五九年の第一回國際モンゴル學者大會は、當時のモンゴル科學・高等研究院 (Шинжлэх ухааны, дээд боловсролын хүрээлэн, Committee of Science and Higher Education) の主催によつてウラン・バートルに於て開催された歴史的な大會であつたが、その「科學・高等教育院」が改組されて、一九六一年に「モン

ゴル科學アカデミー (Бүгд найрамдах монгол ард улсын шинжлэх ухааны академ) の設立を見た。そしてこのアカデミーの設立の前後より、標題にかゝつた數種の學術機關誌の發行が本格化し始め、一九七二年の現在、モンゴル語學文學、モンゴル史、モンゴル考古學、モンゴル民族 (俗) 學などの諸研究分野では、これ等の機關誌が、その存在を無視し得ない質と量を示すに到っている。

さて最初に、『モンゴル研究 (Монголын судлал)』を取りあげよう。

この書が、『モンゴル研究』なる名稱のもとに、現在の體裁をもつようになったのは、私の知る限りでは、一九六五年の“Монголын судлал. Томус V, Fasc 2-7. Улаанбаатар”からであり、それ以前は“Монгол судлалын зарим асуудал” (モンゴル研究の諸問題) [Tomus III Fasc. 1-5, 同 Tomus III Fasc. 6-11, 同 Tomus IV Fasc. 10-21] として發刊されたり、或いは、更に以前には、“Studia mongolica” の名を冠して、モングラフの小冊として刊行されたりして、Studia mongolica として整理しておかないと混亂を來たす恐れがある。

この“Studia mongolica”の Tomus I, Fasc. I は一九五九年に刊行されているので、本年まで十年以上絶えることなく續いていることになる。現在の體裁の『モンゴル研究』になつてから、最新刊の“Монголын судлал. Томус VIII, Fasc. 1-25” まで全部で八冊、筆者はその全巻を所有している。この八冊の内容は、なかなか読みごたえのあるものが多く、モンゴル人民共和国に於ける最近の學術文化の充實向上をうかがうことが出来る。

さて、『モンゴル研究』という學術誌が、いかなる性格をもつものであるかを知っていただくために、最新刊の二冊『モンゴル研究』第七卷、第八卷の目次を煩を厭わず譯出する。

[*Монголын судлал*. Томы VII, Fasc. 1—26, Улаанбаатар, 1970. *Studia mongolica, Institut Linguae et Litterarum Academiae Scientiarum Republicae Populi Mongolici.*]

1 エム・ガーダムバ——成吉思ボクドの九傑と өнчин хуугийн пэгэлсэн шадир (孤兒賢話) の史的基盤。

2 エム・ガーダムバ——チョー・メルゲン (Чуу Мэргэн) とは誰か。

3 デイー・ツェレンドノム——トルファン蒐集品の第二冊の ТМ—51。

4 シャー・ビラ——ダンディの “Зохистаглууны толь” (適切な音律の辭典) をチベット語に翻譯した Лакшимакара, Шондон-Доржжал-цан に関する二通の手紙。

5 チェー・フルタンゲレル——新発見の目錄について。

6 ツェー・ダムディンスレン——免についての説話。

7 エ・ロブサンチュルテム——學者タンダーについての覚えがき。

8 オー・ザグドゥスレン——“Урт сайхан хурэн” (長く美しい褐色の馬) なる歌の史的基盤。

9 シャー・ナシタドメチ——“Дам ядам бурхан” (ついでに、やだま・ボナン) なる歌について。

10 オー・ザグドゥスレン——“Хан хөхуй” (ハン・ホフイ) 讃歌。

11 ツェー・ダムディンスレン——“Лу жанжин гүн” (ル将軍公) に関する傳説。

12 デイー・ゴムボチャブ——史實と関係ある二、三の土地傳説について。

13 ペー・ソドノム——あ

る歌のこと。

14 デイー・ツェデェブ——革命歌における國民歌の傳統の問題。

15 デイー・ツェンドウ——エル・バダルチの文學作品。

16 シャー・ロブサンワンダン——言語における相補、不相補の問題。

17 ゲー・スフバートル——契丹の古代文書に関する報告。

18 ジェー・ツォロー——アル・ハンガイ・アイマクの北部諸ソムのハルハ方言、及び口頭作品の研究。

19 ジェー・トモルツェレン——ハルハ方言のひろさの調和について。

20 デー・ヤン——トド文字の正字法に於て長母音を如何に表記したかの問題。

21 ペー・ビャンバサン——若干の動詞語根について。

22 デイー・トモルトゴ——モンゴル語の數詞 “2 (хоёр)” の構造に関する問題。

23 テー・ダシツェデン——現代モンゴル語の具體名詞の數に関する若干の覚え書き。

24 ゲー・ミデドゥドルヂ——滿洲・モンゴル語の接辭 “-an, -ken” について。

25 ツェー・シユゲル——木版本の生産。

26 チェー・ナムスライチャブ——モンゴルの辭書學。

[*Монголын судлал*. Томы VIII, Fasc. 1—25, Улаанбаатар, 1971. *Studia mongolica, Institut Linguae et Litterarum Academiae Scientiarum Republicae Populi Mongolici.*]

1 エス・ロブサンワンダン——モンゴル人の文學遺產の研究について。

2 エム・ガーダンバ——『元朝秘史』、モンゴル口頭文學に關係ある諸問題。

3 デイー・ツェレンソドノム——ザヤ・バンディダの詩について。

4 ツ

- エー・ダムディンズレン——天女物語。 5 オー・ゾア
グドウスレン——ある歌の寫本について。 6 オー・ゾ
アグドウスレン——ゲミン（中國の國民黨）についての二つの
歌。 7 ディー・ヨンドン——『言葉』という作品につ
いて。 8 シャー・ナツァクドルヂ——odganとotug。
9 ゲー・スフバートル——中央アジア諸民族における文字の
出現の問題によせて。 10 ゲー・スフバートル——鮮卑
などの美術、建築について。 11 シャー・バライシル
——モンゴル語の親族語の副詞について。 12 ペー・ヘ
ンデン——文體論と作家の文體。 13 テイー・ダシツェ
デン——現代モンゴル語の名詞の總數（*сренихи тоо*）と明示
數（*тодорхой тоо*）の若干例。 14 エル・カー・ゲラ
シイモヴィッチ——モンゴル語のアクセントの特徴の問題によ
せて。 15 ディー・トモルトゴ——中世モンゴル語の母
音の同化。 16 デー・トモルトツェレン——バルバ方言
に關する要記。 17 ミデッドドルヂ——モンゴル語、滿
洲語、複合語について。 18 ペー・ソドゥノム——モン
ゴルのエスギー・ゲル（フェルトの家）の名稱。 19 ツ
エー・シャクダルズレン——モンゴル化した外氏族に關する覺
えがき。 20 エフ・シネフー、ツエー・シャルフー——
記録簿に現れる若干の名、表現。 21 ツエー・シユゲ
ル——木版本の文字。 22 ペー・リンチェン——トド蒙
古文字、その文化的意義。 23 イー・カーイリシチン
——ソヴィエト時代に於けるカルマク文語の發展。 24
ペー・ソドゥノム——トド蒙古文字によって書かれた文學作品

から。 25 アー・ペー・バドゥマイエブ——カルマク民
族文化史に於けるザヤ・バンディダの役割。

以上の目次を通觀して知られるように、この『モンゴル研究』誌
には、モンゴル學のいわば殆ど總ての分野——歴史、言語文獻、民
族（俗）、口承傳説などの學問分野——にわたつて多くの論文が掲
載され、各々の論文の質も概して言へば、決して低いとは言えない
（尤も、私は言語關係の論文の他は、その質についての評價力をも
つてゐるわけではないが）。例えば M. Γадамба 教授（ウラーン
バートル大學、モンゴル語學文學科教授）の一連の研究の中で、特
に『元朝秘史』の言語や内容を取扱つた論文の中には、種々の點で
啓發されるところの多い好論文が多い。Ⅶ卷の上掲論文「元朝秘史
——モンゴル口頭文學に關係ある諸問題」は、中でも「秘史」研究
の從來の研究を一段と進めたものとして、高く評價されると思う。
又、Ⅶ卷の Камьян 氏の論文も、トド文字に於ける長母音の表
記の問題について優れた新説を提出した好論文であり、更にⅦ卷の
Г. Дашадян 氏の現代モンゴル語の名詞の數についての論考も
興味がい。言語についての論はこの他に Д. Бямбаан, Г.
Микидорж, Д. Төмөртоо, Ж. Цогоо, Ж. Төмөрдээн
など現代モンゴルに於ける若手研究家の活躍を示す幾つかの論考も
見られる。

又、長老 Ц. Дамдинсүрэн 教授の健筆になる三論文をはじめ、
B. Ринчен 博士、B. Содном 教授の顔も見え、長老教授陣の相
變らぬ活躍ぶりも知られる。

歴史關係の論文は鮮卑、匈奴などの研究家 Г. Сухбаатар 氏の

數論文の他に、Ш. Напалдож 教授の“organとotuy”のみで、おびしい感じであるが、今のモンゴルでは言語研究家に比して、歴史學者の方が少ないことを反映しているものと見られないだろうか。尙紙數の關係で、論文の内容に簡単にふれることも出来ないことをお許し願いたい。

次に、『歴史研究 (Туухийн судлал)』に移ろう。この機關誌は、モンゴル科學アカデミーの туухийн хүрээлэн (歴史院) の發行する三誌の一つで、主として歴史學、モノの論説が發表される。序でに書く、他の二機關誌は、一は“Угсаатны зүйн судлал (Studia ethnographia) (民族學研究)”で、他の一は“Археологийн судлал (Studia archaeologica) 考古學研究”であつて、廣義の歴史學關係の學術論文は上述の『モンゴル研究』と以上の三機關誌のいずれかに發表される。歴史院は、この他にも“monumenta historica”としてモンゴル語の資料そのものの刊行にも意をはらっている。

『歴史研究』も當初は小冊のモノグラフが多く、私が所有しているもので、數論文を掲載した、まとまつた形の本は、

Туухийн судлал Tomus VII, Fasc 1—12. Уланбаатар, 1969.

Туухийн судлал Tomus VIII, Fasc 13—24. Уланбаатар, 1970.

の二冊のみである。このような體裁の本として發刊されるようになったのは一九六四年の Tomus VI ころからであるらしいが現物をまだ見たことはない。

さて、『歴史研究』の内容を知っていたために、上記二冊に

收められている論文名を以下に掲げる。

Tomus VII, Fasc. 1—12.

1 エヌ・セルーオドダブ——バヤン・オルギー・アイマグの考古學遺跡の研究。 2 デイー・ナバーン——鹿石とその諸形態。 3 デイー・ドルヂ——岩石畫再說。

4 ゲー・スフバートル——匈奴と鮮卑間の人種關係について。 5 ツェー・ハンドゥスレン——柔然の生活、文化、習慣について。 6 ハー・ペルレー——三河地帶モンゴル人の口碑の跡を追う。 7 デイー・ゴンゴル——オボル・ハルハ五部の三部は何處へ行つたか。 8 ツェー・ソムダクバ——ハルハの四アイマグの數ホショーについて。 9 ツェー・ナサンバルデル——エルデネ・バンデिता・ホトクトの弟子達。 10 エル・ドゥゲルスレン——ハタンバートル・マクサルダブがウリヤスタイの街を白衛軍から解放したこと。 11 エム・サンデドルヂ——代表官吏。 12

エヌ・ダンガースレン——草刈りスタンツの歴史に關する若干の研究。

Tomus VIII, Fasc. 13—24.

1 シャー・ナツクドルヂ——レーニンとモンゴル史研究。 2 デイー・ゴンゴル——十月革命の影響によつて興つた民族的自由獲得運動と革命的祕密グループ。 3 エム・サンデドルヂ——モンゴル人民共和國行政組織の變革と發展。

4 ベー・ダシツェベグ——ラマ僧達を社會的に有益な勤務に移したこと。 5 デー・ダンヂャムツ——チェー・デム

チグドルズの作品における若干の進歩主義について。

6 エム・サンデドルズ——最初のネグデルの歴史的道程。

7 シャー・ナツァクドルズ——モンゴルの僧院によるアラツト搾取の形と方法（露文）。

8 シャー・ビラ——ハ・白い歴史の分析と著作年代（露文）。

9 ハー・ペルレー——ハ・ジャラ・トーデの作者について。

10 ツェー・ナサンバルズ——デエブツンダンバ・ホトクトの財産。

11 デイー・ドルズ、アー・ペーチェレビヤンコ——東モンゴルの新石器時代の研究（露文）。

12 デイー・マイダル——モンゴルの建築裝飾について。

以上の内容から『歴史研究』誌は、考古學をはじめ、モンゴルの古代、中世、近世の歴史の研究を幅広く含めた機關誌であることが知られるが、特にモンゴルの現代史の範疇に入れられる類の研究が、幾つか見られることは注目に値しよう。個々の論文について言及する餘裕はないが、ハー・ペルレー氏の雄篇「三河地帯のモンゴル人の口碑の跡を追う」の論旨については、専門のモンゴル史家の御意見をおききたいものだと思う。そのために、現在この論文を日本語に翻譯中であることを附記する。誠に不十分な紹介で申し譯ないが、紙白の都合で次に進ませていただく。

『言語文學研究(Хэл зохиол судлал, Studia linguae et litterarum)』は一九六〇年から刊行され、やはり最初の内は小冊が多く、現在のような内容の豊かな機關誌になるまでには數年を要し、一九六四—五年ごろから、ほぼ現在の體裁のものに定着し始めたといえる。モンゴル語及びモンゴル語文獻に關する研究、モンゴ

ル文學についての論考を主な内容とする。この『言語文學研究』は、モンゴル語學、モンゴル文獻學の研究に従事する者にとつては、見落すことの出来ない存在であり、現代のモンゴル人學者の自國語の研究の成果が次々に發表され、特に、現代モンゴル語諸方言の研究は、今までその種の研究にたずさわり得なかつた我々には、貴重な資料を提供してくれることが少くない。参考までに、以下に、最も新しい『言語文學研究』に見られる論文名のいくつかを掲げる。

Хэл зохиол судлал, Томус VIII, Fasc. 1—12, Уланбаатар, 1970.

エル・ベシエ——モンゴル語の動詞變化の歴史についての若干の注記。ペー・ビヤムバサン——現代モンゴル語の動詞の態と相。ペー・リンチェン——モンゴルの詩について。

エー・オヨン——問答歌の若干の問題。デュー・トモル

ツェレン——モンゴル語の音節收縮法則。デュー・トモル

トギー——モンゴル語研究に於ける名詞曲用の分類。

デー・ツェレンソドノム——モンゴル語ダンヂュールの最後の詩。ツェー・シャクダルスレン——『モンゴル秘史』

の *тог* という語について。

以上の論文名から、この機關誌の性格を知っていたとけるものと考ええる。

最後に『口頭文學研究』を簡単に紹介して拙文を結びたい。

モンゴル科學アカデミーの歴史院(Түүхийн хүрээлэн)が上述の『歴史研究』、『民族學研究』、『考古學研究』の三誌を主宰して

いるように、言語文學院(Хэл зохиолын хүрээлэн)の編纂の下に『モンゴル研究』、『言語文學研究』、それにこの『口頭文學研究 Аман зохиолын судлал』の三誌が刊行されている。そして、また一つの機關としてのアカデミーの紀要は、別に БНМАУ Шинжлэх ухааны академийн мэдээ『モンゴル人民共和國科學アカデミー紀要』というのがあり、一九六一年以來今年まで季刊として年四回發行され、すでに四十數冊にのぼっている。なお、六一年より七一年までの紀要は全卷筆者の下に揃っている。

さて、『口頭文學研究』は、一九五九年から刊行され、一九六六年頃までは、専らモノグラフで、現在のような論文集の形をもったものは、一九六八年の“Аман зохиолын судлал. Томус VI, Fasc. 1—14”からであらう。この機關誌にはモンゴル文學の中で

一つの大きな領域を占める Аман зохиол(『口頭文學作品』)には、「バー・ホルロー——モンゴル口碑的敘事詩の若干の問題」、「バー・ホルロー——モンゴルの諷刺文學の特長」、その他いくつかの論説が掲載されている。又、昨年一九七二年にも“Аман зохиол судлал. Томус VII, Fasc. 10”が刊行されている。

以上、モンゴル科學アカデミーの刊行になる出版物の中、特に本誌「東洋史研究」にふさわしいと思える若干の機關誌の紹介を行なったが、何分にも忽忽の中に筆をとったのと調査準備の不十分のため、内容のとぼしいものになってしまったことをお詫び申し上げねばならない。たゞ、現代のモンゴル人民共和國に於ける學問水準の一端をこの拙文で窺っていたらけたとすれば、私としては大きな喜びである。(小澤 重男)